

◆小学生低学年の部◆

最優秀賞

小さな命をみらいへ

島根県雲南市立

久野小学校 三年

難なん 波ぱ 由より 圭か

(永井はかせは、本当に命をたいせつに思う人なんだ
なあ。) 本を読んだり、先生のお話を聞いたりしている
とすごくそう思います。はかせは、自分が病気になるほど、
かん者さんのためにレントゲンをとって、ちりょうしてあげようとしました。それに、白血病になつて立てなくなつても、たくさんの方をひつ死で書きました。は
かせがたくさんの方を書いたのは、戦争や原ばくのおそろしさを言葉にしてのこして、まだ生まれていない子どもたちに知つてほしかったからだと思います。

わたしは、はかせについて考えているときぱつとお母さんを思いだしました。お母さんは、たくさんの野さいを、ひとりで作っています。お父さんは、仕事がいそが

しくて、あまり手伝えないからです。一年間で、四十種類くらいの野さいを、化学ひりょうや農薬にたよらないで育てています。野さいを育てるのは、たいへんです。たとえば、とうもろこしは、実をしうかくするまでに、とても手間がかかります。草をぬくだけではなく、タヌキやカラスから実を守るために、トタンや糸をつけたり、見回りをしたり、世話をすることがいっぱいあります。ひとつひとつの作業を、お母さんは、いっしょうけんめいがんばります。夏の暑い日には、おでこも鼻の下もあせだらけで、かみの毛も、びちょびちょになりながら、ねこ車をおしています。冬のさむい日には、雪にうもれている野さいを、スコップでほって取り出すので、こしがいたくなるとよく言っています。

あるとき、お母さんは、わたしに、

「野さいの命をよりかは、食べているんだよ。」と言いました。わたしは、ちょっとびっくりしました。そんなふうに考えたことがなかつたからです。お母さんは、続けて、

「その命は、よりかだけじゃなくて、よりかの子どもや、その子どもの子どもにバトンタッチしていくとお母

さんはいつも思っているよ。だから、少しでもおいしくなるように、少しでも体にいいように、がんばって野さいを育てているんだよ。」

と、やさしい顔で言いました。だから、お母さんが育てた野さいは、とてもりっぱなんだなとなつとくしました。そんなんしんせんでおいしい野さいを、サラダやに物にして、毎日わたしたちに食べさせてくれるのです。

永井はかせは、とても有名な人です。はかせの書いた本は、外国でも読まれているそうです。うちのお母さんは、決して有名ではありません。でも、はかせとお母さんは、少しにていると思います。小さな命をたいせつにして、わたし達の未来を考えてくれるからです。わたしも、お母さんといっしょに野さいを育ててみたいです。たった一人でがんばっているお母さんを助けてあげたいし、野さい作りをおぼえたいからです。はかせが本を書いて、命のたいせつさをずっと伝えていくように、わたしも、自分の子ども達にお母さんの気持ちを、バトンタッチしたいです。



◆小学生低学年の部◆

優秀賞

人をしあわせにする人に

島根県雲南市立
三刀屋小学校 二年

古瀬篤弥

は、ながいはかせのように、人にゆずることがむずかしいです。

お姉ちゃんとけんかをすることがあります。こないだ、ぼくがあそんでいたら、お姉ちゃんがそこに入ってきたので、「じゃまさんでよ。」といいました。それから、けんかになってしましました。ぼくはわるくないと思つてあやまりませんでした。

ぼくは、けんかはあまりすきではありません。どうしてけんかになつたのかをかんがえてみました。ぼくは、お姉ちゃんをじやまものにしました。じぶんのしたいことを一ばんにかんがえていたからなのかもしれません。

いつしょにあそぶ方ほうをかんがえれば、なかよくあそぶことができたと思います。ぼくだけがたのしくて、人がたのしくなかつたらやっぱりぼくもたのしくあります。

ながいはかせは、せんそうで大けがをしたとき、じぶ

んの手あてをあとまわしにして、まわりの人たちの手あ

てをしました。

けがをしてくるしいはずなのに、人のことを一ばんにまもうとするところがすごいなあと思いました。ぼくだったら、じぶんがたすかることがあります。ぼく

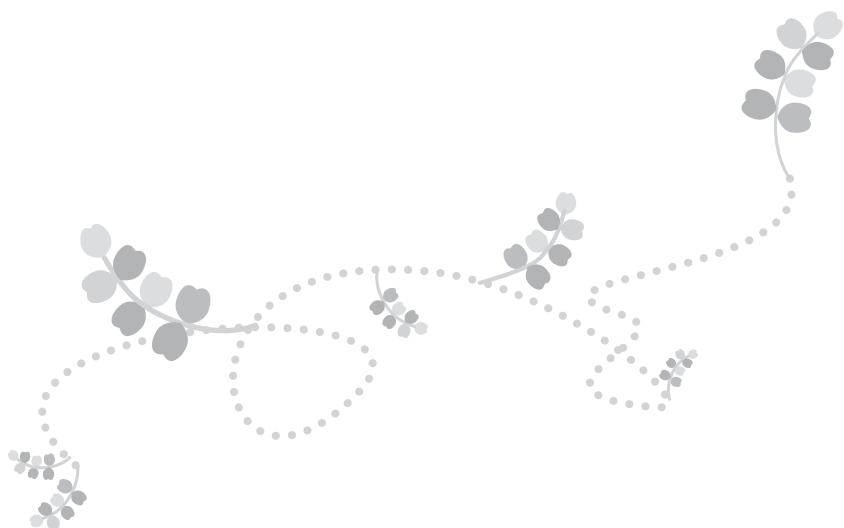
昼休み、りょうくんを校ていにさそおうと思つたときがありました。りょうくんは、教つてやりたいあそびがあるみたいでした。ぼくは、校ていに行きたかつたけれど、すこしだけがまんすることにしました。ぼくがやりたいあそびではなかつたけれど、りょうくんやほかの

友だちとあそんで、とてもたのしかったです。あそんでいるとき、みんながわらつていました。みんながわらつていたからうれしかったし、がまんしてよかつたと思いました。

ながいはかせの気もちがすこしだけ分かってたような気がします。はじめは、どうしたらながいはかせのように、人のことを一ぱんにかんがえることができるのか分かりませんでした。はかせもみんながえがおでいることがうれしかったのかなと思います。だから、みんながえがおになるような手つだいをたくさんしたのだと思います。

ぼくも、みんながえがおになるようにがんばってみようと思います。こんどから、けんかをしたら、すぐにあやまろうと思います。お姉ちゃんとか友だちとあそぶときは、「何がやりたい。」って聞こうと思います。あい手の氣もちをかんがえて、がまんすることをふやしていきたいです。「どうぞ。」ってゆずれるようにしていきたいです。

ぼくも、ながいはかせのように、人をしあわせにできるといいです。



◆小学生低学年の部◆

佳 作

たつた一つの命だから

島根県雲南市立

鍋山小学校 三年

板いた垣がき詩し保ほ

わたしは、三刀屋めぐりで飯石にあるながいはかせの生家に行きました。家の前には川があるし、花もさいていました。はかせはここで魚をつったり、虫をとつたりして遊んでいたのかなと思いました。きっと生き物がすきな人だと感じました。

はかせは、大人になってお医者さんになりました。はかせは、自分が原ばくで大けがをして、けが人を一人でも多くすぐおうとしました。はかせは命をとても大切にしていたのだと思います。

わたしたちは理科でチョウをかんさつしました。二ミリほどのたまごから少しづつ大きくなつていきました。キャベツの葉をどんどん食べてよう虫はさなぎになります

した。わたしは（やつたあ。）という気持ちでした。どんどん色がかわっていくのを見ながら、（早くチョウになれ。）と声をかけていました。とうとうチョウになつた時、（ぶじにチョウになれよかつたね。）という気持ちでした。空に向かってとんでいった時は、「ずっと元気で長生きしてね。」

と見送りました

わたしは、よく池でカエルを見つけます。カエルはさい初はオタマジャクシで、生きのこったものがカエルになれます。前にオタマジャクシが死んでいるのを見つけて、（どうして死んだのかな。生きのこれなかつたんだ。）とかわいそうでなりませんでした。

生き物の命というと、社会科見学で行った神明ぼく場の牛のことを思い出します。牛たちは、目がくりくりしていて、わたしたちをじっと見ました。長いしたをペロッと出してえさを食べている牛や、生まれてすぐお母さんからはなされている子牛もいました。のんびりねそべっている牛もいました。でも、この牛たちが、二年三ヶ月でころされ肉になると聞きました。まだまだ生きれるのに、わたしたちのためにころされて、肉になつてしまふ

なんて本当にかわいそだなと思いました。牛たちは家族でくらせたかもしれないのに、友だちの牛となかよく遊べたかもしれないのに肉にされてしまいます。わたしは肉がすきだけど、わたしたち人間のために命がとちゅうでなくなってしまうのです。なんだか、肉を食べていののかなという気持ちになりました。ぼく場の人気が、

「肉をのこさず、おいしく食べてもらえることがうれしいことなんだよ。それなら牛もよろこんでいるよ。」と言われました。みね寺の見学でも、しおう進料理の話からおしゃさんが、

「わたしたちは、生き物の命をいただいて生きている。
だから、合しょうしていただきますというのです。」

と言われました。わたしは、自分の命はいろんなもののおかげであると感じました。

命を大切にしたはかせに約そくします。毎日を一生けん命にすごしますから。スポ少もがんばりますからね。



◆小学生低学年の部◆

佳 作

によこあいじん

島根県雲南市立
飯石小学校 二年

柿 かきのき
木 き
風 ふう
香 か

「によこあいじん」

おのれのごとく人をあいす。ながいたかしはかせが、いつもおっしゃっていたことばです。自分もげんばくで大けがをしているのに、自分のことはおいて、けがをしている人のおせわをしてあげられたはかせ。どんなときでも、「によこあいじん」という気持ちでいらっしゃったんだなと思います。

毎年、いいし小学校のみんなで、はかせの生い立ちの家の草取りをします。今年もみんなでがんばりました。空の上ではかせが、

「ありがとう。きれいになつてうれしいよ。」
といつていらっしゃるかなと思つてがんばりました。今

年は家の中に入らせていただきました。そこには「いあいせつじん」の字がかざつてありました。校長先生が、「いあいせつじん」というのは、はかせのお父さまであるのぶるさんが、いつもいつていらっしゃったことばです。あいをもつてひとにせつするという気持ちで、いしのみなさんのびょう気やけがを見てあげていらっしゃったのですね。」

と教えてくださいました。わたしは、「いあいせつじん」も「によこあいじん」も、「あい」ということばがあつてよくてているな、同じ気持ちのかなと思って聞きました。

あいすることは、大すきということかな。だつたらわたしも友だちのにこちゃんのことが大すきです。にこちゃんと二人だけの二年生だから、たまには一人だけであそびたくなります。わたしがこんなににこちゃんのことをあいしているから、にこちゃんもわたしだけをあいしてほしいのです。でも一人だけであそぼうというと、にこちゃんは、

「みんなとあそんであげんとね。」
といって、むこうに行つてしまします。一人になると、

けんかをした時みたいにさびしくなります。

にこちゃんがいてくれるとほっとします。キャンプの時も、にこちゃんとじゃないとねられない気がします。にこちゃんとだったら何でもぜんぶ前にすすめそうな気がするからあまたかつたけれど、あまえすぎていたのかな。にこちゃんにいてほしかつたから、みんなのことわすれていたのかな。それは「にょこあいじん」や「いあいせつじん」とはちがうなと気がつきました。はかせはせんそうの時、みかたはもちろん、さっきまでたたかつていてきの人も同じようにみてあげられたそうです。てきもあいするはかせのあいは、ただの大すきとはぜんぜんちがうなと思いました。

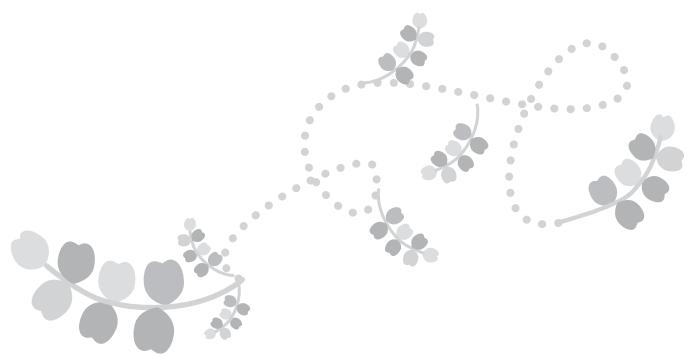
一人でまつていたら、にこちゃんがかえってきてくれました。

「みんなも入れて、そとであそぼう。」

といつたら、

「それ、いいね。」

といつてくれました。にこちゃんのことが大すきだけど、みんなもいっしょがやっぱりいいです。みんなのこともあいしていきます。



最優秀賞

心をつなぐ強い味方

新潟県新潟市立

万代長嶺小学校 六年

坂井敏法

今年、おじいちゃんの十三回忌法要があった。ぼくがお母さんのお腹にいる時におじいちゃんが亡くなつたので、ぼくはおじいちゃんに一度も会つたことがない。でも、心と心はつながつている。

そう思えるのは、法要の数日前、お父さんから一枚の写真を見せてもらつたことがきっかけだ。軍服を着て馬に乗り、厳しい目をしている若いころのおじいちゃん。

「シベリアで抑留されていたころの写真だよ。」

お父さんはそう言うと、真剣な表情でゆっくり話し始めた。第二次世界大戦の終わりに多くの人がシベリアに抑留され、寒さや飢えや病気で毎日のように死んでいたこと。

おじいちゃんは目の前で死んでいく仲間たちに、何もしてあげられなかつたという自責の気持ちと無力感でいっぱいのこと。だから自分が生き残つたにも関わらず、絶望感のどん底からぬけ出せなかつたのだという。

そんな苦しみから、わずかな救いの光を見出すきっかけになつたのは、死んだ仲間たちに対する祈りの心だった。たとえ仲間がこの世にいなくても、その人々たちは自分の心の中に存在している。そのことに気付いた時、おじいちゃんは僧侶になる決意をしたそうだ。

生きている自分と死んだ仲間たちは、心と心でつながることができる。そう悟つたおじいちゃんは生きることに前向きになり、その後の人生を歩んでいくことができた。

「人と争つてゐる姿を見たことがない。どんな時も笑顔で、いつも相手の立場で物事を考える人だつたよ。」

いろんな人がおじいちゃんの思い出話をしているのを何度も聞いたことがある。

ほんの小さな争い。それが大きな戦争の始まりになつて、数えきれないほどの不幸をよびこむことをおじいちゃんは知つていたのだ。

人間は欲の固まりだ。欲を追うことで自分を見失い、

相手を傷つけてしまう。世の中すべての人が相手を思いやり、人格を認め、いたわりの気持ちで接すれば、決して戦争など起ころうはずがないのだ。

お父さんは写真の他に一冊のノートを見せてくれた。そこには、やっと読み取れる文字で「敏法」とたくさん書いてあった。

「おじいちゃんが死ぬ間際まで氣力をしぶって、病院で書いていたんだよ。」

とお父さんが教えてくれた。

敏法^{としのり}。人のために世の中のために、役に立てるような人になれ。そんな思いをこめてぼくに名前を与えてくれたおじいちゃん。

ぼくは将来、おじいちゃんとお父さんの跡をついで僧侶になるつもりだ。そしていつも人の心に寄りそい、どんな小さな心の傷み^{いた}でも取りのぞいてあげたい。小さな幸せを大きな幸せへつなぎ、世の中から争いと不幸をなくし、世界中を愛でいっぱいにするために。

夢はかなうと信じている。敏法という名前が力強い味方となつて、ぼくとおじいちゃんの心をつなぎ、見守っ

てくれているのだから。



◆小学生高学年の部◆

優秀賞

平和とは

島根県雲南市立

三刀屋小学校 四年

勝部七彩

永井隆博士が願い続けた「平和」。

全校朝礼で、

「平和ってどんなことだと思いますか。」

と聞かれたとき、私は、戦争がなくて楽しく生きられる
ことじやないかなと思いました。でも、あまりよく分か
らなかつたので、家に帰つて、お父さんに聞いてみまし
た。すると、

「戦争がないこと。」

と言われました。私は、平和とはどんなことなのかもつ
と知りたくなくつて、他の家族にも聞いてみました。

おじさんに聞いてみたら、おじさんも、

「戦争がないこと。」

と言われました。次に、おじいちゃんに聞いてみました。
おじいちゃんは、

「戦争がないこと。毎日が楽しくすごせること。そして、
毎日同じことができること。」

と答えてくれました。おばあちゃんは、

「家族みんなが幸せになること。争いのないこと。」
と言われました。ひいおばあちゃんは、

「やすらかに楽しく生きるのがお楽しみ。」

と答えてくれました。私は、「やすらか」という言葉を
知らなかつたので国語辞典で引いてみました。すると、
穏やかで何の心配事もない様子だということが分かりま
した。何も心配せずに楽しく生きることが、ひいおばあ
ちゃんにとっての平和なんだと思いました。最後に、お
母さんに聞きました。お母さんは、

「家族みんなでご飯を食べること。」

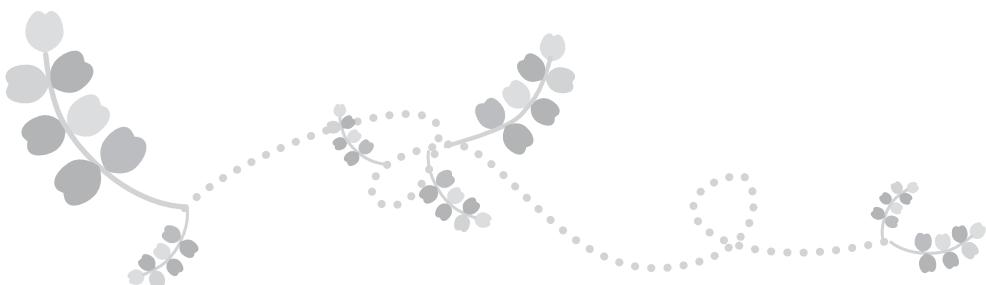
と言われました。

家族みんなに聞いてみて、平和についていろいろな考
え方があることが分かりました。その中で一番心に残つ
たのは、おじいちゃんの言った、

「毎日同じことができること。」

という言葉です。毎日同じことをしていたらつまらない
ように思えるけど、戦争のようなきけんなことが起きた
りせずに、毎日同じようにご飯を食べて、働いて、ねる
ことが、平和なんだとおじいちゃんは言いたいのだと思
います。おじいちゃんの言葉を聞いて、私は、平和とい
うのは当たり前のことなんだと気づきました。きっと、
永井隆博士も、みんなが当たり前に平和ですごせるよう
にと思って、「平和を」と言われたのだと思います。

私は、家族がなかよく、楽しくすごすことが平和なん
だと思うようになりました。私の家族は平和にくらして
います。でも、他の人たちはどうでしょうか。この間も
テレビでいじめのニュースを見ました。いじめられてい
る人は平和にくらしていると言えるでしょうか。世界の
いろいろな国の人たちはどうでしょうか。戦争をしてい
る国はないのでしょうか。私は、私の家族以外のことは
よく知らないことに気づきました。これからは、新聞や
テレビのニュースをよく見て、私の家族以外の人たちに
も目を向けたいと思います。そして、これからも家族の
みんないろいろなことを話し合いたいと思います。



佳 作

今度はぼくがパワーを送るよ

島根県雲南市立
飯石小学校 四年

小林渚人と

七月四日に、永井隆博士の生い立ちの家の草取りに行きました。

「博士がこの庭で遊ばれたんだね。」と話しながら友だちと草を取りました。作業が終わって家の中にいると、部屋にかけられた「以愛接人」の額の文字がぼくの目にとび込んできました。校長先生から、「愛を以て人に接するという意味ですよ。」と教わりました。博士のお父さんは、博士が幼いころから「以愛接人」の心を教えてこられたのだなと思いました。だから博士は、自分が被爆していても、自分より人の治療を優先し、その上にたくさんの傷ついた人の心にパワーを送ることができたんだなと思いました。

実はぼくにとって、生い立ちの家の草取りは初めての

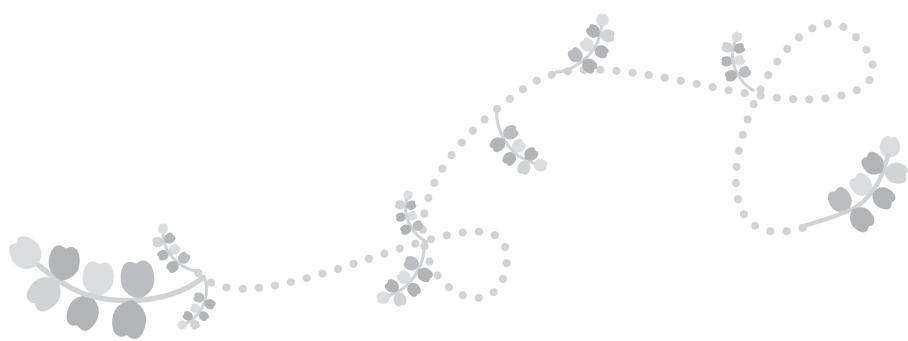
経験でした。今年、岡山からこの町に引っ越してきたからです。始業式の日は、こちこちになつて母の車に乗りました。学校に着くとそうじ中で、健斗くんがトイレのドアからにっこりと顔を出してむかえてくれました。その表情がおもしろくて、不安な気持ちがちよつと軽くなりました。三、四年教室に入つたとき、快斗くんが「ゲームもてる。」と話しかけてくれて、遊ぶ約束までしました。だんだんこの学校での生活が楽しみになつてきました。

休みの日は、スポーツ少年団で活動することにしました。初めての練習の日、はづかしくて、だれとも話さずになりました。二回目は行きにくくなり、続けて休んでしまいました。すると蒼馬くんのお母さんが「うちの子も入っているから、いっしょにやろうよ。」と声をかけてくださつたので、勇気を出して行くことができました。今度はみんなが「岡山でソフトやつてたときは、どこ守つてたの。」などと話しかけてくれました。じゅうなん体そうをするときには、蒼馬くんが「いっしょにやろう。」と声をかけてくれました。ぼくの心はほかほかになり、パワーがわいてきました。それからは、ちょっとずつな

れて、毎回行けるようになりました。新しい学校でもス
ポ少でも、友だちや友だちのお母さんから前に進むパワ
ーをもらつたような気がします。ぼくも、相手の気持ちを
想像し、パワーを送れる人になりたいと思います。

ぼくは、たのんだことを母がすぐにしてくれないとき、
責めてしまふことがあります。ぼくの言葉は、母の心の
パワーを吸い取っていたかもしません。夜勤をしてぼ
くを一生けん命育ててくれている母に、パワーを送らな
いといけないのに。ぼくの胸が、チクリといたんできま
した。

ぼくは、担任の先生から、「渚さんの笑顔はすてき
ですね。折り紙つきですよ。」とほめてもらいます。そ
れを聞くとうれしくて、また、ニッと笑ってしまいます。
この自まんの笑顔で、だれかにパワーを送れたらいいな
と思います。それがぼくの「以愛接人」かな。友だちか
らぼくにもらつたパワーを、今度はぼくが、自まんの笑
顔で周りの人々に送る番です。



佳 作

理想と現実の狭間で

島根県雲南市立

寺領小学校 六年

西村里奈

私は、自分の部屋の窓から見える景色が大好きです。窓いっぱいに広がる柔らかいじゅうたんのような田んぼと、それを包み込む深い緑色をした山々を見ていると、何だか心が落ち着くからです。

しかし今から数十年前、今私が見ているこの景色と同じ場所で不思議な出来事があったことをおじいちゃんから聞きました。その話がきっかけで、私は戦争について深く考えてみたいと思うようになりました。戦争がどこか遠くの出来事のように感じていた私にとって、しうげき的なお話だったのです。

おじいちゃんは当時、小学校の一年生。八月六日広島に原爆が投下されたのち、負傷した人たちが、はるか広

島から汽車に乗って日登駅に降り、青年学校という所で治療を受けていたんだそうです。おじいちゃんは、その青年学校へ運び込まれた人が、近くの桜川へ向かい、着ていた服や包帯を洗つておられるのを見たんだそうです。その時、近所の大人たちから、「あの川には毒が流れているから絶対に行つてはいけない。」

と何度も言われたとおじいちゃんは言つていました。當時おじいちゃんは、それが何のことか分からなかつたそうですが、今思うと、その毒とは放射能のことだつたようです。

私は、その話を聞いて、少し怖くなりました。それは放射能が怖いと思ったのもありますが、遠い存在だと思っていた戦争が、一気に身近に感じられるようになつたからです。

それと同時に、私はもう一つの怖さも感じました。それは、偏見や差別なんて絶対にしないと思っていた私の心が、少しだけ揺れるのを感じたからです。

私もしその場にいたら、どうしていたでしょう。自分が被爆することを知つていながら、負傷した人に手を

差し伸べることができたのでしょうか。

正直に言うと、今の私にそんな勇気はありません。人の命が大切なことも、偏見や差別がいけないことも知っているはずなのに、実際には体が動かないよう思うのです。

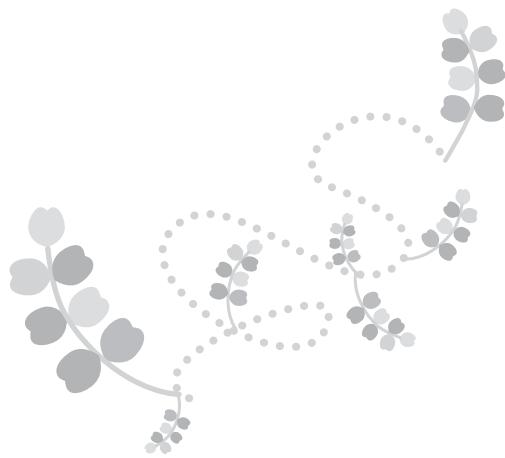
永井隆博士は、放射能の存在と怖さを知りながら、自分の命もかえり見ず、苦しんでいる人々のために必死に働きました。その功績は、世界中の人たちが知っているでしょう。

しかし、永井隆博士も人間です。きっと私と同じように、迷いや恐怖を感じたことがあったに違いありません。けれど、そんな迷いや苦しみを乗り越えてきたからこそ、博士は真に人々を思いやれる本物の人になれたのだと思うのです。

今、福島原発の事故で苦しい避難生活をしておられる人がたくさんいます。放射能で差別を受けている人がいるとも聞きました。

今こそ、永井隆博士の「如己愛人」の精神が必要な時なのです。迷わず行動に移さなければなりません。それこそが、平和のために今私がすべきことだと考えていました。

ます。



最優秀賞

人間の価値に喜びを

島根県雲南市立
木次中学校 三年

若槻由衣

私が初めて見た北朝鮮は、白い霧の中にあった。あいにくその日は小雨が降っていて、いくら写真を撮っても、真っ白にしか写らなかった。

去年の夏休み、私は初めての海外旅行で韓国に行つた。現地の中学生とふれ合い、ホームステイを体験して、最終日に向かったのが、韓国と北朝鮮の国境に位置する「オドゥサン統一展望台。」

北朝鮮が見られる。私はどきどきしていた。核実験、ミサイル…。そんな言葉が、頭の中で鳴り響いていた。どこまでも白くぼんやりとしている北朝鮮。ほとんど何も見えなかつたけれど、その白さがはつきりと境界線を引いているように思えた。たった三キロ。晴れていれば歩いている人すら見える距離なのに。これまで日本では感じたことのない異様さが迫ってきた。

それを更に強めたのが、帰りのバスの中で見た光景だった。ふと窓を見ると、川沿いに延々と固い鉄柵が張り巡らされていた。迷彩柄の軍服を着た何人の男の人たちの横を、私は通り過ぎていった。柵に取り付けられたメガホンのようなもの、境界線が見渡せる高い位置にある小屋。そういったもの一つ一つが、何のために作られたのだろう、と考えるとぎゅっと心が冷たくなった。自分の知っている世界とは全く違う世界がすぐそばに広がっている。自分は狭い所に住んでいたんだな、と初めて実感したのがこの時だった。韓国に滞在した五日間、私はこの光景を見るまで全くこんなことを感じていなかつた。最終日までの五日間、私は韓国でたくさん人の温かさに触れた。私たちはお互いに言葉が分からなかつたのに、そんなことは大した問題ではなかつた。お互いに相手に歩み寄り、声ではなく、心を聞くことができれば、意外に簡単に人は通じ合えるのだ。ホームステイで緊張していた私の手を握ってくれた手の温かさは、言葉よりもずっとはつきりと思いを伝える一つの伝達手段がある

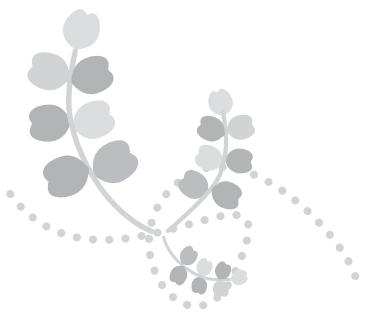
ことを感じさせてくれた。今でもあのぬくもりを覚えている。

北朝鮮と韓国の国境に立った時、人のことを理解しようとする姿と対照的な、今なお戦争を続け、傷つけ合つたその先に幸せを見つけようとする姿が、とてもいびつに思えてきた。私は平和な日本しか知らないけれど、今から六十年前、それほど昔ではない頃、日本も戦争のまつただ中だった。今現在も、私が見ていないだけで、世界ではまだ戦争や紛争はたくさん続いている。そんなことをして何になるのだろう。心の底から安らぐ時が来るのだろうか？傷つけ合いをしたって、相手も自分自身も幸せにならないことを、私たちは心の底では知っているのに。そして、国と国との間の溝を掘り進め、互いの手に武器を光らせずとも、言語の壁を越えてその溝を埋めるだけの力が人間にはあるのに。

人は、自分がどう行動するかを自分の心で決めることができる。私たちの心は不完全で、そこから迷いや悩みが消え去ることは決してない。これまでそうだったように、これからもたくさん人間は迷つて間違うだろう。それでも、一度感じた手のぬくもりを、私たちは決して

忘れない。その喜びは指針となって、私たちの行く道を照らしてくれる。今日の笑顔や喜びの導くままに、私たちは永遠に正しい道を探し続けるべきなのだ。そうして探し続けた向こう側に行つた時、本当の人間の価値を知るのだと思う。

人間の価値は不完全なことだと思う。それが人間らしさを作っていると私は思う。不完全故にどこまでも正しい道を求め続ける人間。私は、そんな人間であることに、喜びを持って生きていきたい。そして、いつも人のぬくもりを感じて生きていきたい。みんな同じ人間。私たちの間には、境界線などありはしないのだから。



優秀賞

時を超えて永遠に続いていくこと

島根県雲南市立

三刀屋中学校 二年

板持乃野可

母方の曾祖母は、私が七才の時に亡くなった。私をとてもかわいがってくれた。白髪で色白で丸い瞳でいつも静かに笑っていたことを今でも覚えている。曾祖母は老人施設に住んでいた。部屋に入ると、らっきょうの酢漬けと洋服ダンスの中の虫よけの香りが交じり合った匂いがした。夏がくるとそんな曾祖母の姿をふと懐かしく想い出し、なぜだかとてもほっとした気持ちになる。そんな気持を母に話すと、曾祖母のことを話してくれた。

曾祖母はひとりで静かに暮らしていた。早くに夫を亡くし、親しくする友人もなく、いつも一人で農作業をしたり洋裁をしたりしていたという。言葉数も少なく、あまり笑うことのない人だったそうだ。人を避けるように

暮らす曾祖母を心配した母は「誰か友達と旅行にでも行つたらどう?」と、何気なく提案したことがあるという。少しの間があって、曾祖母はポツリとこう言つたそつだ。「友達は皆、ピカドンで死んでしまったんよ。」と。

幼少から女学校を卒業するまで曾祖母は広島で暮らしていた。義姉を探しに原爆投下後の広島市に入り、自身も二次被爆をしていた。母はその時初めて曾祖母の人生の一部分を知ることになったそうだ。曾祖母が亡くなってしまった今、本当の気持ちを直接聞くことはできない。でも私にはなんとなく想像できる。曾祖母は、原爆で多くの友人を亡くし、自分だけが生きていることを申し訳ないと思いながら、生きていたのではないか。だからひとり静かに生きていくことを選んだのではないだろうかと。

私は曾祖母との想い出の中で一番印象に残っていることを母に聞いた。曾祖母が亡くなる少し前のこと、曾祖母の部屋を訪れるが、毎年母が送るひ孫の写真入りの年賀状を取り、「これ毎年のとつてあるんよ。こうやってテレビの上にいつも置いておいてね。毎日元気で大きゅうなりんさいってお願いしとるんよ。」と、とても穏や

かに笑っていたそうだ。母はその穏やかな曾祖母の笑顔は忘れる事はないと言っていた。そして、それを想い起こすたびに胸が温くなるそうだ。

私はこの話を聞いて、曾祖母はもう亡くなってしまったけれど、ずっと私のそばにいてくれているんだと確信した。目には見えないけれど、いつも曾祖母のやさしい気持ちに私は守られていたのだ。

私は、中学校に入学し憧れていたソフトボール部に入部した。練習はきつかったが、レギュラーになって、試合でプレイする自分を思い描きずっと夢見ていた。しかし、昨年の夏体調を崩し、選手として続けることができなくなってしまった。私は悔しかった。目の前の現実を受け入れることができず、無性にイライラしてショッちゅう泣いていた。

そんな時、曾祖母のことを思い出した。曾祖母は自分でどうすることもできない運命を受け入れて、静かに生きた。そしてこの上ない、やさしい気持ちを私に注いでくれた。曾祖母はいま「あの世」にいる。しかし運命に逆らわず強く、やさしく生きた曾祖母の生き方は、今もなお私を励ましてくれる。曾祖母の人生の一部分に私

もいて、命の輪がつながって今の私も生きている。私のことを心から大切に思ってくれていた曾祖母の愛情が今でも私の中に流れ続けている。そう思ったら悩んでいた気持ちがスーっと軽くなった。

私は人を心から大切に思う気持ちは、人を穏やかな気持ちにすることができる、それは時を超えて永遠に続していくことを曾祖母から教わった。だから私は周囲の人には「あなたは私にとってなくてはならない大切な人なんです。」という思いを伝えていきたい。

地球上では、とっても小さな私のとっても小さな行動だけ、それを積み重ねていけば、きっと皆が穏やかな気持ちになれるはずだ。これからも、私は曾祖母から受け継いだ命を大切に、自分の素直な気持ちをたくさんの人々に伝えていきたい。



佳作

君は行くのか

千葉県柏市立

柏第二中学校 三年

成澤じゆう

「世光、君はどうしても行くのかい」

「ああ、仕方ないからね」

そう言い残して世光は母国に戻っていった。

鄭世光に初めて会ったのは、世光も私も共に小学三年生の春だった。私の家族は大学の家族寮に住んでいて、隣が世光の家だった。

家族寮は外国人が半分近くを占め、日本留学のため、さまざまな国から集まっていた。留学前は医師や教師、エンジニア、牧師といったように多種多様である。

当然、世光のように子供たちも世界各地からやって来て、私は世光とすぐ友だちになった。世光は韓国生まれだったが、流暢な日本語を話した。

やがて月日が経過し退寮の日が来たが、鄭一家は日本在住を希望した。我が家と世光の家とは大変仲が良かつたので、時々会うことになる。世光と会える日が迫ると私はその日を指折り数え、両親はキムチの元になる白菜を大量に買い込み土産とした。

世光の両親は本当に優しく、伺うたび昼食の用意をし歓迎してくれた。食事が終わると両親はお茶を飲みながら話しに花が咲く。昨年、私は親同士の話を聞いて愕然とした。

「鄭さんは日本人が好きですか」

父がさりげなく口にした言葉は、当然「好き」という言葉が返ってくるものと思っていた。しかし、世光の父は、

「いや、嫌いです。日本は韓国人を迫害し、たくさん殺しましたから」

父は当然だと言わんばかりに相槌を打ち、少し悲しい表情を見せて、

「当然です。確かに太平洋戦争のとき、日本は鄭さんの母国に対し、ひどいことをやりました」

そう言いながら、ペコリと頭を下げた。鄭さんはあわ

てて、父を制しながら、

「待って下さい、私はあなたを責めているのではないのです。日本にも韓国にも悪い人はたくさんいます。良い人もたくさんいます。私が日本に来たのは、日本と韓国が本当の意味で善き隣人になればと思ってのことです。歴史は忘れませんが、何時までも歴史に振り回されていては善い隣人にはなれません」

鄭さんの言葉は重い響きを持っていた。

鄭さんのお母さん、すなわち世光の祖母の話はもっと凄まじい。実際に体験した戦争当時は、まるで奴隸のように扱いを受けたという。僅かなことで日本兵が簡単に人の命を奪つたことは本当に、その上飢餓や重労働の悲惨さはどれもひどいものである。

世光も同じだった。私は鄭さんやおばあさんの話だけなら、まだ昔の話で通せると思ったが、世光までもが同じ気持ちでいたことがショックであった。

世光は私たちと同じ学校に通っていたが、世光のお母さんが沈痛な顔で私の母に話している。

「世光が最近ハングル語を話せなくなってきた。書くことも厳しいので一度韓国に帰そうと思っている。韓国

は徴兵制があるので、行く年齢になると言葉の壁でいじめに遭うかも知れない」

そうか、そうだったのか。日本は憲法九条があるため法律で徴兵はないが、韓国は十八歳以上になれば兵役に就かなければならぬ。朝鮮戦争はまだ完全に終わっていないから、世光のお父さんも軍隊経験があるそうだ。

世光と私の置かれた立場があまりに違い過ぎて、鄭さん一家のように戦いの歴史を平和の歴史に変えようとする人々を、また戦争に引き摺り込む現実が許せなかつた。

世光の家を離れるとき、見送る世光が全速力で私たちが乗る車を追いかけて来た。私は車から身を出して精一杯手を振った。

それから間もなく世光が母国語を勉強するため、日本を離れて行つた。徴兵に備えた母国語であつても、世の光となつて「セガン」よ、きっと戻つて来いよ。

佳作

愛と平和について

東京都

立教女学院中学校 三年

今村日向子

私は、愛を伝える人になるという夢がある。そして、その夢への第一歩として私の考えることを、作文させていただこうと思う。

『「愛」とは何か「平和」とは何か』。よく、愛は憎しみの、平和は戦争の対義語として使われる。このことから考えると、「憎まないこと」「戦争の無い状態」が、この問い合わせに対する答えかのように思える。しかし、本当にそうだろうか。憎しみは愛を知らないけれど、愛は憎しみをも理解していないか。戦争は戦争自身を十分に理解していないが、平和は過去の戦争を踏まえて作りあげるものではないか。では、真の愛と平和とは何か。

私の学校は、平和学習に熱心で、この世の中に溢れて

いる人々の痛みについて、知る機会を沢山与えてもらえた。六月には、丸木美術館に行って「原爆の図」を見学し、原爆投下直後の凄惨な様子、苦しそうな人々から目を背けそうになりながら、恐怖を感じて来た。その日の夜は、恐ろしくて眠れなかつた。戦争は嫌だ、と強く思った。

このように、人々の痛みに触れて、感じることは、全ての問題解決を前へ進める原動力になる重要なことだと思う。そして、他人事で問題を終わらせないためには、強い想像力が必要になるかと思う。

また、感じることはすごく大切だが、それはまだ解決に向けての始まりでしかないとも思う。更に前に進むためには、色々な立場から、色々な方向から考え、何が原因で辛い思いをする人々が出てしまうのか見極め、これから出来ることを考え、行動に移すということがものすごく必要とされる。この時、「戦争は良くないよ。」だけでは単なる道徳的な幻想だし、「私なら、いじめなんてしない。」だけでは、それは机上論に過ぎない。ここでも想像力が大切で、深く考えるべきだと思う。

そして、私が、私なりに、世の中にはびこる社会問題、

戦争や紛争、貧困、いじめや虐待、偏見や差別、それらだけでなく日常的な友達や親との喧嘩など様々な形で見える世界の歪みについて深く考えた時、全ての問題の根本の原因に同じものを見つけた。それは、自分以外の全ての人、動物など、命あるものを寛大に受け容れること、尊んで大切にすることがおろそかにされているということだ。いや、この表現には間違いがあった。おろそかにしたいと思ってする人など居ない。ただ受け容れること、大切にすることを十分に世界から教わってこなかった、つまり、十分に受け容れられてきていない、大切にされてきていたのだ。だから自分の受け容れ方、大切にする方法も分からぬ。自分に対して出来ないことを他人に出来る訳がなく、人を傷付ける行為にまで発展してしまうのだと思う。全ての問題の原因は、一個人や一つの国などにあるということではなく、まだこの世界全体が、受け容れること、大切にすることを十分に知らないことにあるのだ。

ここでそろそろ言いたい。この、「全ての命あるものを寛大に受け容れること、尊んで大切にすること」こそ「真の愛」とするべきではないか。そして世界中が

この「真の愛」を知り、お互いに受け容れ合い、大切にし合うことが出来るようになった時に訪れる幸せな世界こそが、「真の平和」な世界だと思えるのだ。そして、その世界は必ず訪れることが出来る、と信じている。「平和をもたらすのは、ややこしい会議や思想ではなく、ごく単純な愛の力による。」—— 永井隆

私には、愛を伝える人になるという夢がある。愛を知っている人が一人でも多くなるように、真の平和が少しでも早く訪れるように、これからも私に出来ることを頑張つていこうと思う。



最優秀賞

やけど

秋田県立

横手高等学校 一年

後藤 ごとう のはら

いとこが泊まりに来た。腕にやけどの跡があった。てかてかして痛そうだ。共働きの両親の代わりに夕飯を作る彼女だが、調理中のミスにしては変な位置だ。

「あ、これ？ 理科の実験やつてた時に、アルコールランプで焼いたビーカー鉢を押し付けられた。」

何ということだ。先生は知っているのかと聞いたら、見てないのに言つても信用されないと思つて伝えてないとのこと。

「ジューって音したねえ。」

と、謝るどころか笑っていたという犯人。いとこは「犯人」は大げさだと言つていたけれど、これは傷害罪ではないのか。もし年齢が二十歳すぎていたら、新聞に載つ

ていたかもしない、犯罪行為だ。

人間の肉も牛肉も焼けば音がするのか実験したかったという「犯人」は、とてもそんな残酷なことを思いつきそうには見えない女の子だという。想像力がないのか思いやりがないのか、いや、両方なくとも人間を実験台にするなんて恐ろしいことだ。どうしても試したいなら自分の腕を焼けばいい。熱いかもしれないという予想はついていたからこそ、他人の腕を焼いたのだろうから、確信犯だ。このまま黙つていては次の犠牲者が出るかもしない。

「親には話したの？」

「いじめのニュースが氾濫している時に、こんな小さなやけどで大騒ぎしては担任の先生に迷惑かけるから我慢しろって言われた。」

今回の事件は小さなことでも、たまたまでもない。悪いことだと気付かないまま社会に出たら、もっと大きな事件を引き起こすかもしれない。今、黙つていれば、その子を救つたことにはならないと思う。今、自分のしたことを知り、悔やみ、償わないと、実刑判決をうけるような凶悪犯人に育つかもしれない。

それにしても驚いたのは、県や学校によって先生方のいじめ指導に差がありすぎる事だ。いとこが転校した中学校は、もともと大規模校で目が行き届いていなかつたのに、原発事故や津波で自宅に戻れなくなつた生徒が転校してきて、生徒数が増えさらに大変な状況だそうだ。いとこのようにおとなしい子はすぐにねらわれる。大騒ぎする親子の対応で忙しくて、じっと耐えている子は気付いてもらえない。

私の出身中学の先生方は、怖かった。どうでもいいことでも怒鳴られたり部活動禁止されたりした。たとえば、ヒトラーの真似をした同級生が体育館に呼び出されて一時間以上説教されていた。

「ドイツの人たちがそばにいたらどんな気持ちになるか考えてみろ。収容所で苦しんで亡くなつた人たちに心の中でお詫びしろ。」

知らないということは怖いことだと、その時に思った。どうでもいいことどころか、大切なことだったのだ。

去年の原発事故に対して、他国の人的心無い書き込みがネットを炎上させたこともあった。『原爆の次は原発が、いつのこと日本人全滅すればよかつたのに…』

これなんて書き込んだ人を調査して、徹底的に反省させ、処罰すべきだと思った。よりによつて、戦後六十年以上経つて、未だにまだ原爆の後遺病に苦しむ人たちが生きているというのに、どこをどうすればこんな残酷なセリフを思いつくのか、憤りを抑えることができなかつた。

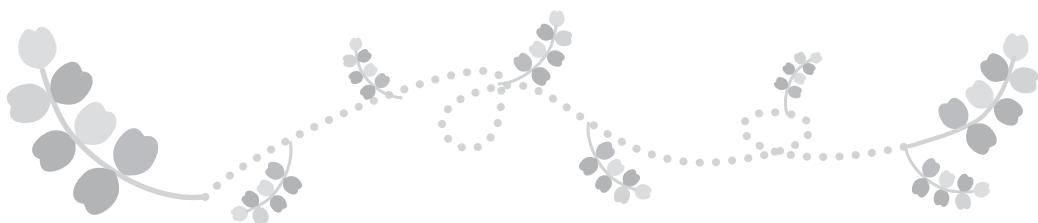
私も何度かやけどしたことがある。ストーブの跡が残っている部分もある。すぐに冷やして痛みが残らないよう手当てしてもらえたけれど、当時の広島や長崎で被爆した人はどうだつたろう？ほとんどの人は薬も包帯も足りなくて、治療法も病院も、生きる希望もないまま逝つたと聞いた。だからこそ自らも被爆しながら手当てに当たつた永井隆博士の功績が輝き続けているのだ。

平和を語るなら、まず、やけどの痛さを想像してみる。命が一瞬で影になつたほどの熱さを想像してみる。冷やせば治まる傷ではなくて、生きている間ずっとつきまとう痛みがどんなものか、自分に耐えられるか想像してみる。

そして、無理だと分かったならば、せめて犠牲になつた人たちに自分ができることは何かを問うてみる。

安易に平和を語ってはいけない。知らずに誰かを苦しめるかもしれないから。平和はあまりに広くて深くて難しい。まずは、隣にいる人を苦しめたり悲しまれたりしないようになることが大切だと思う。

いとこのやけどは、いろいろなことを考えるきっかけになった。私は、小さな小さな痛みに気付いて助けてあげられるような大人になりたい。小さな平和から大きな平和が生まれる。小さな平和を守ることで大きな平和を守ることができる。そういう良いサイクルが生まれるようには世界が変わっていけばいい。



優秀賞

それが痛いという事を

東京都

私立女子学院高等学校 一年

武田実優

太平洋戦争が終結してから、六十七年という年月が経とうとしている。このおよそ二、三代の世代交代が起こるだけの年月を経た後の戦争と、私たちはどのように向き合っていくべきなのだろうか。

戦争から月日が経ち、年月が経つにつれて世の中から失われていく最大のものは、やはり戦争がかつてあったという実感だと思う。

感情と理屈は、必ずしも一致するとはいえない。その事を私が実感した場所があった。広島の、原爆ドームであり、平和資料館である。学校の研修旅行で私たちはそこを訪れた。様々な事前学習をして、戦争の被害状況や歴史的背景、原子爆弾の威力や仕組みまで学んで、私は

八月六日に何が起きたかを知っていた。しかし私は原爆ドームの外観が、平和資料館の展示品が、原子爆弾によって形を変えられてしまったものだと「実感」できなかつた。原爆ドームの骨組みだけの姿も、焼け焦げた三輪車も、爪も、シャツも、止まった時計も、何もかもが最初からその姿で作られたのではないかと思つてしまつたのだ。私はどんなに考えても、私の身の回りにある品々が焼け焦げて灰になる状況を自分のいる世界におきかえて想像できなかつた。それは現在の世の中がそれだけかつてあつた戦争から遠ざかっているという事であり、私が戦争というものを自分とは遠い次元で物語のように考えていた事の表れである。私はその事に思い当たり深い自己嫌悪に陥つた。

原爆ドームや平和資料館を訪れたのと同じ日に、被ばく者の方々のお話を伺う機会があつた。私がお話を伺つたその方は、「戦争が悪い」と何度も仰つていた。その「悪い」ものが原爆でも、アメリカでもない事が私には少し意外であったが、確かに戦後数十年の間は、その方も、自分が被害者であるという意識は強かつたそうだ。しかしその方は、もうこんな思いは嫌だと思って、戦争

について事細かに学ばれた。その結果として、戦争が悪い、戦争は人の心をおかしくしてしまう、という結論に至ったそうだ。そしてその方は、あなた達に完全に戦争の事がわかるとは思わない、とも仰った。あんな思いをする必要はない、ただ起きた事を知つて欲しい、と。私はこの言葉を聞いて、救われた。開き直る訳ではないが、実感できないからといって、私たちに何もできる事がない訳ではないし、戦争を学ぶ事は、決して無駄ではないのだ。

私は、戦争が終わってから年月が流れていく事は、特に「戦争について学ぶ」という点においては、決して悪い事ではないと思う。例えば当時の日本に勝ち目が無かつた事や、戦争が起きる要因となつた様々な出来事、それに、全国各地の戦争体験者がのこした戦争についての証言の蓄積も、戦時中はおろか、戦後しばらく経つまではほとんどの人が知り得なかつた事だ。そういった点で、現代に生きる私達が戦争について情報を得る事は、とても簡単な事なのだと思う。

年月を経る事で、情報は整理され、まとめられ、また新たに生み出され、発見され、蓄積されていく。しかし

そこに戦争があつたと実感できる機会は、確実に減つていく。

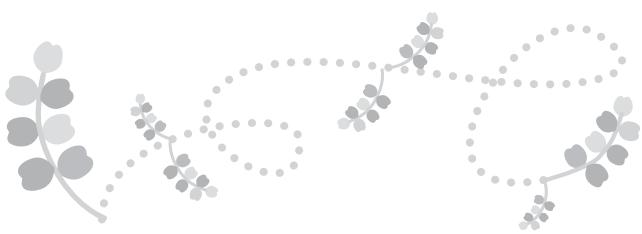
百聞は一見にしかず、とは古くから言われている諺で、つまりはどんなにたくさんの情報を集めても、実際体験する事には敵わない、という風に解釈できる。確かにそうだろう。私達に戦争の痛みが完全に理解できる訳ではないだろうし、私達には戦争の実感を得る事すら難しい。

しかし、例え私たちに戦争の痛みが理解できないとしても。私達はかつてあつた戦争が痛いという事を知ることはできる。そしてその痛さを想像した時、私たちの良心や自分を大切にする心、他人を思いやる心といった、現在では当たり前に持つ事ができる、しかし戦争の中では決して当たり前ではなかつた感情によって、戦争をしたくないという気持ちは生まれるはずだ。

私たちが戦争と向き合つていく上で何より大切な事は、知る事、知ろうとする事であり、その上で少しの想像力をを持つ事だ。平和には様々な定義があるが、人間同士が殺し合う戦争は、間違いなくどの平和からも最も遠い所にある。そんな戦争を起こさせないようにする為に必要な事はごくシンプルで、戦争を、痛い事を嫌だと強く思

うだけでいいのだと思う。欲望よりも、憎しみよりも、強く、強く。戦争が痛いという事を知っていて、一人の人間としてのこころを持っている私たちは、それが、できる。世界中の誰にだって、きっと、できる。

戦争は痛いものだ、痛いものは皆にとつて嫌なものだ。そんな認識が、世界中に共有されるようになるといい。その為にはまず私達が、はつきりと戦争を嫌だと思う事こそが何より大切であると、私は思うのだ。



佳作

愛情と信頼

島根県立

三刀屋高等学校 二年

福田結花

己の如く人を愛することは、とても難しいことです。

他人の為に自分の身を犠牲にすることは、尚難しく、簡単に出来ることではありません。それは、現代の日本では特にありがちなことだと思います。皆、自分が生きていくことに精一杯で、家族を支えることも厳しく、ましてや他人の荷物などは、背負えれば崩れてしまします。しかし去年起った、東日本大震災以降、日本国内に留まらず世界各国が、東北地方の復興を願って、救援や激励をしてきました。私は、当時の目に見えない一体感がとても心地良く思いました。何かしらの行事の時に味わう、周囲の人々が一つのことに向かっていく様子。震災から一年以上経った今は、それが薄れてきたように思えます。

私自身も、いつからか震災のことが頭から離れ、きっかけが無ければ話題にものぼらなくなりました。これはとても悲しいことなのだと思います。

しかし、変わらず思うこともあります。震災以降、私は、母ときちんと生きていることを有難み、感謝するようになります。

母は、自分より娘が大事だと、人前で口に出します。

実際に、母は私の為に何でもし、睡眠時間をどれだけ減らそうとも働いています。私は、目の下にくまを作り、痛めた足を引きずりながらも働く母を見る度に、やりきれない気持ちになります。私一人を育て、大学に行かせるためだけに、母の人生をつまらなくしているのではないか。私はこんなに気ままに生きていて良いのか。目に見える母の老いは、年齢だけではなく、私を育てることの苦労が原因に違いない。そんな不安を持ちながら、母が作った食事をとり、母が代金を支払うことでつながるネットワークを利用する毎日を私は楽しんでいます。楽しいだけで良いわけがないのに、私はまだ子供で、勉強でしか孝行はできないのだと言い聞かせて、苦労から逃げています。己の如く人を愛する、とは程遠く、無意識

のうちに平和を願っていても、戦争は恐ろしいし死ぬことが怖いという自己中心的な願望です。憎しみ合う世の中を恐れているわけではなく、自分の身の安全を思うだけです。しかし、もしも母と憎しみ合うことになつたらと思うと、それはとても怖いです。これは、如己愛人の言葉とは異なりますが、全く違うことは無いと思います。私はある意味では、如己愛人に基づいた行動をとっています。

対象が身内よりも外になれば、私の中の如己愛人は崩れます。友人関係はもちろん大事にしていますが、自分と欲をより大事にしているように感じます。満たされていても、欲しければ手放さず、物欲を重んじています。

これは現在の状況がもっと酷くなつてしまったら、とう不安からの行動だと思います。更に言えば、自分が苦労することになつたらどうしようか、私は咄嗟に考えてしまいます。友人達は私を助けてくれます。その事実を知っているのに、常に助けをもらえるわけではないからと、開ききらない心で接しているのかもしれません。文字にしてみると、私は、さびしい人間だと感じました。担任の先生との面談では、よく、クラスの皆となじめな

いと話します。私自身が、もっとオープンに、もっと周囲に关心をもたなければいけないと自己分析をくり返しながらも、未だに解決しません。私はとことん臆病で、如己愛人の基本であろう勇気が足りません。足りないものがあるのが人間ですが、自分が満足する人生を送る上で足りないものは、あつてはいけないと思います。人生も自分の要素で、己の一部分だからです。私は、もっと周囲の人と関わって、楽しく会話をし、お互いに助け合える関係を築きたいです。そのために、勇気は必要なもので、時間がかかる課題です。

私には外に向ける愛が足りません。如己愛人という言葉は、万人に向けてこそそのもので、身内にだけ向けるものではありません。私がすべきことは、万人と関わるような勇気と積極性を持つて、多くの信頼関係を築くことです。それは、世界全体に言えることでもあると思います。平和を望んで、周りと喜怒哀楽を共有するためには、強い信頼関係と、信じようとする意志が必要です。



佳作

しつぽもひと役

島根県立

三刀屋高等学校 二年

高尾恭平

「しつぽもひと役」。この言葉は、何事もうまくいかなくて自分に自信が持てなくなつた時、自分は周りから必要とされていないのではないかと思つた時、必ず前を向くことのできる言葉だと僕は思っています。

僕には八歳上の兄がいます。兄は小学生の頃から野球

を始めました。中学校でも野球部に入り、練習していました。しかし、三年生になつてもなかなか試合に出させてもうえず、声がよく出ているという理由で、コーチャーをしていました。コーチャーとは、ベースの横でランナーに指示を出す人のことです。兄は、三年生の最後になるかもしれない大会でもコーチャーで、試合に出させてもうえませんでした。そのことを父に話すと、父は父の母

から聞いた話をしてくれたそうです。「しつぽもひと役つて知つてゐるか。馬のしつぽは立派で絵に描いても迫力がある。でも、ぶたのしつぽは小さくて、目立たなくて、迫力もない。でも、ぶたを絵に描いてみるとしつぽがなくては絵にならない。目立たなくて必要だと思われないものも必ず何かの役に立つてゐるんだ。」と。「だから、コーチャーも一見、地味で試合に出てゐる選手とは違つて目立たないものだけど、コーチャーの判断で点が入つたり入らなかつたりする。それほど、コーチャーはチームの役に立つてゐるから、一生懸命頑張れ。」と言つてくれたそうです。兄はこの言葉を聞き、コーチャーといふ自分だけのポジションで、コーチャーもひと役だといひ頑張ることができました。

そのような兄の体験を聞いても、幼なかつた僕はあまり「しつぽもひと役」の言葉の力を理解することはできませんでした。しかし、兄と同じように小学校で野球を始め、中学校でも野球部に入るとその言葉の意味、素晴らしさがよく分かるようになりました。二年生になつて最初の試合、偶然にも兄と同じように監督から三塁コーチャーを任せられたのです。その日から、僕は毎試合コー

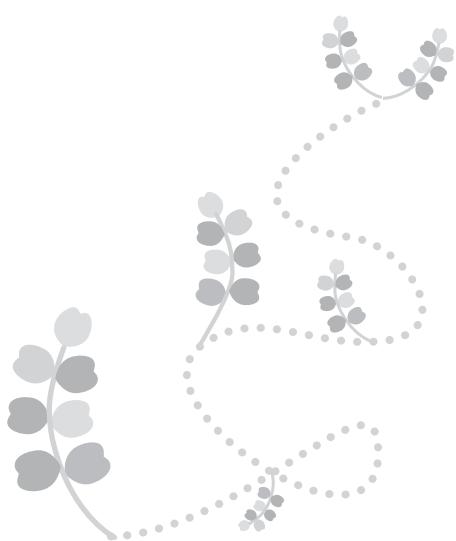
チャーをするようになりました。自分がランナーを回さなければ点は入らない、間違って回してしまえばタッチアウトになる、そんな責任を感じながらも続けていくうちに自分もチームの役に立っているのだと、こんな自分でも勝利に貢献できるのだと、そしてコーチャーもひと役なのだと感じることができました。

もう一つ、「しっぽもひと役」の大しさを感じた時があります。それは、自分が試合に出らなくなつた時のチームの仲間からの励ましや、心配してくれる言葉でした。普段は気づかなかつたみんなの気持ち、そしてチームに自分を必要としてくれていたということを気づかしてくれました。

今社会ではいじめ、それによる自殺が問題となっています。そんな今だからこそ僕は、「しっぽもひと役」という言葉をたくさん的人に知ってほしいと思います。いじめを受けている人、悩んでいる人、自分に自信の持てない人、そんな人たちへのエールになるとと思うからです。苦しくなつて自ら命を落とす人が一人でも少なくなり、自分は一人じゃないんだ、自分は必要な人間じゃない

んだとこの言葉を知つて気づいてほしいです。

将来、僕に子供ができたら父が兄に話をしたように僕も子供に「しっぽもひと役」の話をしてやりたいと思います。そして、永井博士の「しっぽもひと役」に込められた思い、願いがこれから何十年何百年も受け継がれていくってほしいと思います。僕はこれからも言葉を大事に生きていきたいです。



最優秀賞

語り継がれなかつたこと

オーストラリア

尾お
亦また
義よし
則のり

銀髪の小柄な老婆が、黒っぽい服装の男たちで込み合った駅前のパブのフロアを、肩で人垣を突き飛ばしながら、つぼめた黒い傘の石突きをこちらに向けて突進してくる。壁を背にしてジントニックをすすっていた私は、思わず、左右に目をやつた。が、傘の先端は確実に私を指している。まさか――。

尖った金属が私の胸を突こうとした瞬間、私は体を半身にねじってかわし、片手で傘の腹を掴んで取り上げたが、バランスを崩して、大雨で濡れた床に仰向けて倒れた。周囲が飛び退いて輪のようなスペースができるが、私を見下ろす衆目は犯罪者でも見つめるような冷たさで、はっとした。大勢が、事の顛末を一部始終見ていて、悪

者は彼女だということが歴然としているではないか。なぜ――。

私は、怒りをぐっと抑え、体を起こした。心の中では、文字にも出来ない言葉で彼女を罵りながらも、思い切り懇懃に言った。

「ご婦人、これは一体どういうことですか？きちんと説明してもらいたい」

「お前、ジャップだろう、だからやったんだ」「私が誰であろうと、暴力は大いに困りますね。謝罪するか、理由を言いなさい。お気に召すなら、警察に突き出して差し上げますよ」

「いいよ、やってごらん」

「わかりました」と言って、私はカウンターに向かって言った。「警察を呼んでくれ。このご婦人が、傷害未遂の理由を話したいそうだ。……そのバーテンダーさん、何やってるの！早くしろよ」

「わかったよ！そこまでやることはないだろう、言うよ」と、老婆が私の腕を押さえた。

結局、二人が声のトーンを落としたために緊張感が緩み、張り付いた異様な目は私から散って、周囲は何もな

かつたようにビールを片手に、和氣あいあいの会話に戻った。

向かい合い、一息ついた老婆が語り始めた。

結婚したばかりの夫が、第一次世界大戦に召集され、ニューギニアのジャングルで日本軍と戦い、激戦地で日本軍の捕虜になった。生還はしたもののは片方の腕を失っていた。何をされたのか、どうやって逃げてきたのか、何を訊いても口を固く閉ざすばかりだった。じきに酒に浸り、性格まですっかりと変わり、喧嘩が絶えなかつた。結局、離婚し、息子を引き取ってひとりで育てると、夫は、じきに心筋梗塞で死んでしまった。以来、彼女は日本人をひどく憎んできたという。語り終わると、勝ち気な老婆の目は潤んでいた。

私は、少し大げさに騒いでしまったかも知れない。とはいえる、私は何も悪いことはしていない。仕掛けてきたのは彼女の方ではないか。だいたい、第二次世界大戦での日本軍の捕虜虐待行動の実態など、教科書にも書かれていらない平和ボケ・しらけ世代だったし、語ってくれる人もいなかった。戦争が始まった時すでに壮年だった父は、太平洋戦争には行っていないし、召集適齢の兄弟も

いなかつた。

「今日が何の日か、知ってるだろうね？」
「国民の休日ですね？」

「だから困るよ、日本人は。『アンザックデー』。戦死した兵隊たちを追悼し、帰還兵たちを励ます記念日よ。このパブ、中央駅の前にあるから、兵隊を送り出す最後の見送りの場所になつてた。愛する人を抱擁して涙で送り出した場所だった。そんな場所であんた、のんきにカクテルなんか飲んでるから……」

—— そうか、店の客の異様な冷たい視線と黒装束は、そういうことだったのか——

「神聖な時と場所を、無神經に私が土足で汚してしまったのですね。それは悪い事をした」

「そうやって、わかってくれればいいのよ。……私も見境なく、酷いことをあんたにしたかも知れない」

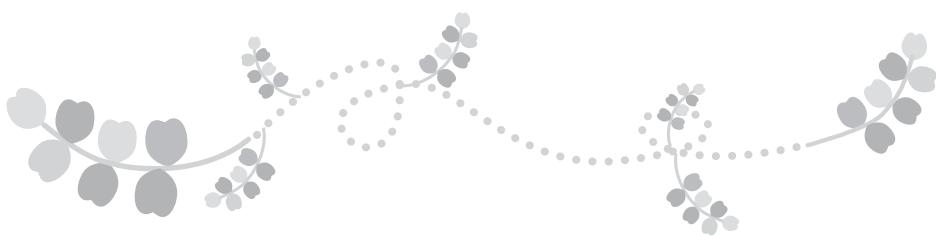
二人はさらにとつくりと、歯に衣着せぬ物言いで正直に語り合つた。老婆と私はお互に両腕を回しハグを挨拶に和解すると、地元産のビールをおごり合い、世間話に花が咲いた。「こうやって話せば、オーストラリア人も日本人も、変わらないんだねえ。日本人と話したのは、

初めてだよ。変な出会いだけど、また一緒にここで飲んでね」、老婆は言った。

——これが戦争の遺産というものなのか。私の知らない戦争は、半世紀以上を経て地球の裏側の人々の心の中でまだ続いている——

戦勝国の人々でさえ心に傷を負っている。ましてや、無謀な日本軍のために戦ってむざむざと死んでいった敗戦国の日本兵と、本心一つ語るのも未だに憚られる帰還兵や戦死者の家族、愛する人々の持つて行きどころのない封印された想い。旧敵国在住の私は、そのことを思うと不憫で哀しみがこみ上げてくる。

勝敗両者に傷を残す戦争。私たちは決して忘れてはいけない。いつまでも憶えて、次世代に語り継がなくては。ただ、相手を赦す心がなければ、自らの苦しみも消えはしない。



優秀賞

百二十円の優しさ

島根県

景 かげ
山 やま
智 ち
絵 え

私の机の中には、七年間一度も使われていない百二十円があります。この百二十円を見る度に、私はある日の出来事を思い出し、力をもらうことができます。

七年前、私が中学二年生のことです。季節は冬、雪は降っていないものの、曇り空が広がり、とても寒い毎日が続いていました。その頃私は怪我を繰り返していて、所属していたバレーボール部の部活に参加することができませんでした。思うように治らない怪我、毎日練習を頑張っている仲間、近づいてくる大会、焦りや不安、悔しさや情けなさ、そして何より自分に対する腹立たしさ、色々な感情が私の中を埋め尽くし、毎日心が押しつぶされそうでした。そんなある日、学校が終わり、多く

の生徒が部活に行く中、私は整体に通うために祖父の迎えを待っていました。近くの段差に座り、目の前にある公園で楽しそうに遊んでいる男女の兄弟をぼおっと眺めしていました。公園の中を無邪気に笑いながら走り回ったり、高い所から飛び降りたりする二人を見て、私は知らないうちに涙を流していました。自分は一体何をやっているんだろう、こんな時に怪我をして、頑張っている仲間と同じ練習ができないどころか、力にさえなれていな、どうして自分ばかり…。あの子たちが羨ましい、自分もあんな風に走って跳んで動き回れたら…。そんなことを考えているうちにいつの間にか泣いていました。そんな時、一人の子供がその子たちのおじいさんと思われる人に

「喉が渴いたからジュースが飲みたい」

と頼みました。そのおじいさんはポケットから小さな小銭入れをだし、子供たちに一本ずつジュースを買い、ジュースを飲み終えた子供たちはまた公園で遊びだしました。その時、そのおじいさんが微笑んで声をかけてきました。恐らく地元の方だったので、中学生が今部活の時間だということを知つておられたのでしょう。

「毎日寒いね、部活はどうしたの、怪我でもしたの」

と声をかけてくれました。私は怪我をして部活ができないことを話すと、そのおじいさんはとても辛そうな顔をして、

「怪我は大丈夫かね、それは辛いね、でもきっと大丈夫、良くなるよ」

と声をかけて下さいました。そして私に百二十円を差し出し、

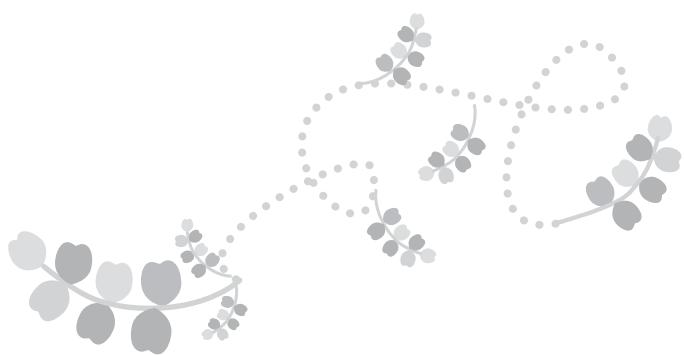
「何か温かい物でも買って飲みなさい、体も温まるし、体が温かくなると心も温かくなるよ」

と百二十円を私に握らせ、その手を両手で包み込んでくれました。その手は少し冷たいけどでも温かくて、私はただ泣きながらお礼を言うことしかできませんでした。その後、そのおじいさんは私の頭を優しくなでてから、二人の子供たちを連れて帰っていきました。手の中で握りしめられていた百二十円は私の心を温かく、優しい気持ちにしてくれました。私は百二十円を握りながら、車の中でも泣き続け、あのおじいさんのような温かい人になろう、そして自分があのおじいさんのように温かい、優しい人になれたら、この百二十円を使おう、そう決意

したのです。

そんな私は今、理学療法士という職業を目指し、専門学校で勉強しています。今年の十一月には実習があり、初めて本格的に患者さんと関わることになります。どんな時もおじいさんのように、温かい心を忘れないで、患者さんや家族の方たちと関わっていきたいと思っています。理学療法士という仕事は、このおじいさんや永井隆先生のように己の如く人を愛することが、大切になると 思います。相手の苦しさや辛さを理解する努力をし、患者さんの気持ちに寄り添い、共感していくこと、当たり前のことのようで何より難しい事です。そして、己の如く人を愛するためには、まずは自分のことを愛さなければなりません。自分を愛しているからこそ、他の人のことも自分のことのように愛しなさいという永井隆先生の 教えが活かされてくるのだと思います。そしてこれは最近強く感じることがですが、自分自身が笑顔で元気でないと、相手を笑顔で元氣にすることはできない、自分自身がその人のことを本当に思っていないと、相手も自分のことを受け入れようとはしてくれない、そんな風に思います。まずはとにかく自分から、自分のことから。永井

隆先生もそうやってこられたからこそ、現在まで先生の教えが受け継がれてきているのだと思います。人を本当に心から救ってくれるのは、必ずしも高度な医療やお金であるとは限らない、その人の優しさや温かさ、相手のことを自分のことのように考えてくれる心が時には相手や自分を救っているのだということを心に留めて、温かい理学療法士になれるよう、努力していきたいと思います。



佳 作

愛と絆強めた大震災

宮城県

武 田 義 之

去年三月十一日。突然の東日本大震災。

山肌を削って造成した団地のわが家は、庭は地割れし、家が傾いた。まわりの家も、わが家と同じような被害をうけた。

余震が続く。このまま家に居ることは危険だった。いつ、家が倒壊するかわからない。

着のみ、着のまま、小学校体育館に避難した。体育館は、大勢の避難者で、ごったがえしていた。

電気も、ガスもストップし、暖房器具さえもない。また暗い夜を、余震に怯えながら、一睡もせずに夜を過ごした。

体育館には、体育用マットがあつたが、早い者勝ちで

ある。遅れて避難してきた高齢者や幼児は、冷たい床に座つたままだった。
仙台の三月初旬は、まだ冬の中なのだ。外は、小雪がちらついている。幼児や高齢者の中には、こん、こんと咳込む人もいた。羽織ってあげたくとも、着のみ、着のままの避難である。寒さにふるえながら、じっと我慢するほかはない。

救援物資も届かず、お腹をすかした幼児は、お腹がすいたと泣き叫ぶ。阿修羅の如くとは、このような光景のことをいうのだろうか。

二日目の夕方のことだった。五十歳ぐらいの男性が、体育館のステージにかけあがり、大声でみんなに叫んだのである。

「皆さん。困っている時はおたがいさまです。小さい子供さんやお年寄りのために、横になるスペースと、体育用マットを、優先的にさしあげようじゃありませんか。」

がや、がやしておった体育館が、一瞬、しーんと静まりかえった。

「そうですよ。貴方のいうとおりですよ。」

体育館の片隅から、中年の女性の声がした。

「そうだ、そうだ、そのとおりだ。」

やがて、ざわめきが館内にひろがり、勝手に独占されていた体育用マットが南側の端に並べられていった。冷たい床の上に座つたままのお年寄りにとって、どれほどありがたいことだったか。

「ありがとうございます。ありがとうございます。」

なん回も頭をさげ、目に涙さえ浮かべているおばあさんもいた。幼児は喜んで、マットの上をかけまわっている。それを皆が、ほほえみながら見つめているではないか。寒さにふるえながらである。

その様子は、なんかほのぼのと、心温まるものがあつた。日本人の心の温かさなのだ。困っている人は、助けてあげなくっちゃ。まわりの絆の強さを知った瞬間でもあつた。

困つたのは、寒さや食べものだけじゃない。トイレだつた。トイレの前には長い行列が続く。少しでも我慢のできる人はよい。だが、高齢者や幼児はそうはいかない。なかにはお漏らしをしてしまった年寄りもいた。

マットのこと以来、幼児や高齢者が先頭となり、若者

や中年者はそのあとに並ぶようになった。

三日目の朝、自衛隊の隊員が校庭にテントを張り、炊き出しが始まつた。熱い味噌汁が胃にしみ、味噌汁がこんなにおいしかったのかと、改めて、その味をかみしめたのである。特に、高齢者の顔が輝いて見える。うれしかつたのである。

トイレにしろ、炊事にしろ、幼児と高齢者優先は、避難所にいる間、ずっと続いたのである。

ひと昔前までは、向こう三軒両隣り、おたがいに助け合いながら生きてきた。それが日本人だった。日本が豊かになるにつれ、その互助の精神が影をひそめ、他人には干渉しないという、そんな考え方と変わつてしまつた。互助ということが、煩わしいと感じる人が、多くなつてきているのかもしれない。

大震災は、忘れかけていた互助の精神や人間愛ということを蘇えさせてくれたようだ。震災によつて、多くのものを失つてしまつた人びとだつたが、助け合うことの大切さ、絆や、やさしさの大しさをしっかりと、とりもどしてくれたようである。

震災直後、自衛隊員を始め、全国から警察官、自治体

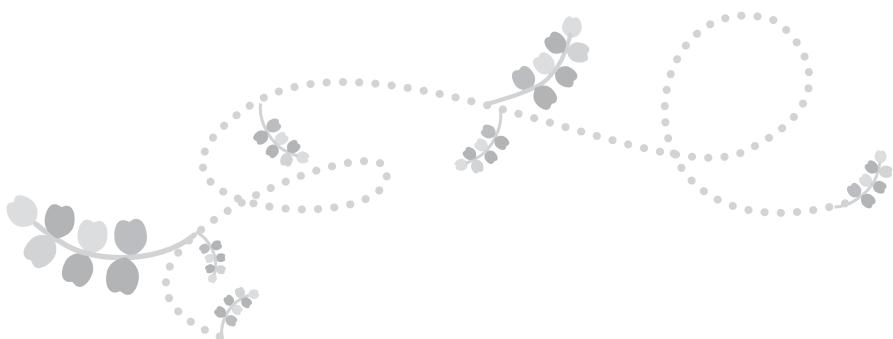
の職員、多くのボランティアの人びとが駆けつけ、懸命になつて被災者の救援にあたつてくれた。

手弁当で遠くから駆けつけ、瓦礫の撤去、弱者の救助、食事の提供、避難所での励ましなど、ひたむきに、献身的に被災者救援にはねおつてくれた多くの人びと。ただ、ただ、感謝の気持ちで一杯である。

助け合い、励まし合い、支え合う。そのようなすばらしい日本人が、周囲にたくさんいるのだ。そのことを、痛いほど肌で感じとった大震災でもあつた。

大震災をとおして、多くのことを学び、たくさんのことに気づかされた。この全国の人びとの愛と絆の強さに触れ、我われ被災者も、もつと頑張らねばならんと強く思っている。

このことが、復興に取り組む被災者の原動力ともなつていている。



佳 作

祖母を想う

兵庫県

松まつ
川かわ
千鶴子ちづこ

母が十二才の時、戦局が次第に苦しくなっていき、基地のある鹿屋は激しく攻撃された。母たちはそのため、日は何度も防空壕に逃げた。ある時、敵の機銃掃射の弾が逃げる母の足元をかすめたかと思うと、母たちを庇いながら一緒に走っていた祖母に…。

「お母ちゃん、お母ちゃん。」

母は三才下の妹と二人で祖母にしがみ付いて泣いた。その時、自分たちも一緒に弾に当たって死んでしまった

二年前の初春、母が天国に旅立ってしまった。母はとても戦争を憎んでいた。なぜなら母親を戦争で亡くしてからだつた。母は決して戦争体験を話そうとしなかった。テレビで戦争場面が出てくれば、「そんなもん見たくもない」と、いきなりチャンネルを変えたり消したりした。父が戦争の話をし出すと、台所へ行き両手で耳を塞ぎ聞こえないようにしていた。時には、恐怖が蘇えり台所の隅でガタガタ震えていることもあった。そんな母がたった一度だけ私がお嫁に行く数日前、涙をいっぱい溜めて祖母の話をしてくれた。

母の故郷は鹿児島県鹿屋。目と鼻の先に特攻隊の基地があった。母は毎日沢山の兵隊と戦闘機を見て育つた。

「おばあちゃんって、どんな人だった?」
 「私は母を慰めるように訊ねてみた。母は、私を見つめ

「写真一枚どころか、何の形見もない。全部焼けた…。」
 「おばあちゃんって、どんな人だった?」

た。そう言えば振り返ってみると私は母に祖母のことを一度も訊ねたことが無かった。子供心に何故か祖母のことを訊いてはいけないことのように思っていた。祖母のことを訊くと、母が悲しそうな顔になるのを感じ取つていたからかも知れない。母は私の質問に遠くを見るような目で、

「よく働くいい母親だった。器量はあんまり良いとは言えんけど、機織りが上手で田んぼや畑の後、夜遅うなるまで織つててなあ。私の絹の浴衣も織つてくれたよ。母さん…。」

と呟き、祖母を想い号泣した。今までに見たことも無い母の泣く姿だった。私は壊れて潰されそうになつた心を抱え、涙を堪えていた少女だった頃の母を思つた。

「お母ちゃん、いっぱい泣いたらええからね。今まで我慢してきた分、吐き出したらええからね。」私は母の背中を擦りながら一緒に泣いた。

遺影の無い仏壇で毎朝夕手を合わせている母。母の気持ちを思うと胸が詰まる。私は祖母が戦争で亡くなつたということを、ずっと以前に叔母から聞いて知つていた。だが、機銃掃射の弾に当たつて死んだとは聞かされなかつ

た。叔母はとてもそれを言葉にして言うのは、子供だつた私に残酷過ぎると思い説明しなかつた。それに叔母もその光景を思い出すのが辛かつたのだ。

人が簡単に撃たれて死ぬ。それも戦つてもいない人間が…。命を奪われた祖母を想うと、心の底から悔しく思う。封印を解いて母は私に話すことによつて少しあは楽になつてくれただろうか。私は母の心を抱き、平和に改めて感謝し嫁いで行つた。

母は晩年認知症になつた。日に日に子供の頃に戻つていき、時には私を祖母と間違えて「母さん。」と呼び、「危ないから、早く逃げないといけない。」と手を引っ張ることもあつた。母の中では戦争は終わるどころか、無理矢理押さえ込んでいた蓋が取れ、時代がどんどん遡つてしまつた。戦争が終わつて六十五年にもなつていたのに心の傷は癒されることも無く、抉れたまま逆に深まつていくようだつた。結局母は、また戦禍の中に戻つたまま逝つてしまつた。何も楽しいことが無かつた子供の頃なのだが、そこには生きていた母親がいた。その母親は母は戻つて会いに行つたのかもしれない。

天国のお母さん、おばあちゃんに会えましたか。お母

さんは今頃、あの十一才の頃に戻って、きっとおばあちゃんとおじやみやあやとりをしていることでしょう。星空を見上げるとそんな一人と後ろで微笑んでいるおじいちゃんの姿が見えるようです。

おばあちゃん、無念で悔しかったでしょう。本当に許されないことです。おばあちゃんがどんなに平和を願っていたことか、私にはよく分かります。この今ある平和を大切に守っていくので、お母さんと一緒に見守ついて下さい。

